

1. 地質解析結果		
検討項目	要 点	備 考
1.2 処分場周辺の地質・地下水分布	<p>本年度調査結果および既存資料をもとに、処分場および周辺の地質、地下水分布を推定し、地質図面類として整理した。図-1.2.1～1.2.3に、各測線の地質断面図を示す。以下に、その概要を記す。</p> <p>(1) 南北方向（処分場縦断面図：図-1.2.1）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>処分場背面山体の地下水位は、山体が高まっていること（稜線部の標高：約300m）、西谷川の谷で湧水が確認されていることから、山体の中央部付近では現況の処分場（覆土を含めた天端高さ：約158m）よりも十分に高まっていると考えられる。そのため、<b>処分場から西谷川への地下水流動は極めて生じにくいと判断される。</b></li> <li>木ノ芽川対岸には、傾斜30°前後の斜面を有する山体が位置する。木ノ芽川沿いには道路トンネルが2本掘削されているが、山体はその背後で標高200m付近まで高まっていることから、地下水位も十分に高まっていると考えられる。そのため、<b>処分場から木ノ芽川を通じて対岸まで浸出水が及ぶ可能性は、極めて小さいと推定される</b>が、今後、高密度電気探査等により確認する予定である。</li> </ul> <p>(2) 東西方向（D測線：図-1.2.2）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>処分場東側では、稜線の地形が処分場の分布高さに対して高く（稜線部の標高：250m）、谷部での湧水も確認されていることから、地下水位も十分高まっていると考えられる。そのため、<b>処分場から谷部を通じて東側の山体に地下水が移動する可能性は、極めて小さいと考えられる。</b>ただし、詳細については今後確認する必要がある。</li> <li>一方、処分場西側の斜面裾部で実施した高密度電気探査：H測線では、廃棄物、浸出水の分布を示唆する低比抵抗帯は確認されないこと、現況道路付近まで露岩が確認されること、処分場に対し地形が高く（山頂の標高約270m）地下水位の高まりも期待されることから、<b>現況では処分場西側山体を通じる漏水経路が存在する可能性は小さいと考えられる。</b>ただし、処分場西側にはチャートの分布が確認されており、地盤や地下水に関する直接的なデータが得られていないことから、今後地盤の水理特性を把握する必要がある、</li> </ul> <p>(3) 木ノ芽川沿い（A測線：図-1.2.3）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>木ノ芽川沿いで実施した高密度電気探査：A測線では、遮水壁より深部に比抵抗値の小さい箇所が局所的に解析された。既往の地形図や遮水壁施工時の記録などと対比させた結果、該当箇所は岩盤内に位置することが明らかとなった。</li> <li>その原因については、遮水壁施工（セメント注入：図-1.2.4）時に混在される硬化剤が、周辺地下水と結合し水和生成物（エトリンジャイト等のカルシウムに富んだ膜）を形成することで、測定時の電流の流れに影響を与えた可能性等も考えられるが、詳細は今後調査を実施して確認することが必要と判断される。</li> </ul>	<p>※ 断面作成位置は、図-1.1.1参照</p> <p>図-1.2.1 処分場南北方向地質断面図</p> <p>図-1.2.2 処分場東西方向地質断面図</p> <p>図-1.2.3 A測線沿い地質断面図</p> <p>図-1.2.4 薬液注入孔平面図および薬液注入ラップ長</p> <p>【出典】 敦賀市民間最終処分場木の芽川漏水防止対策工事 報告書</p>

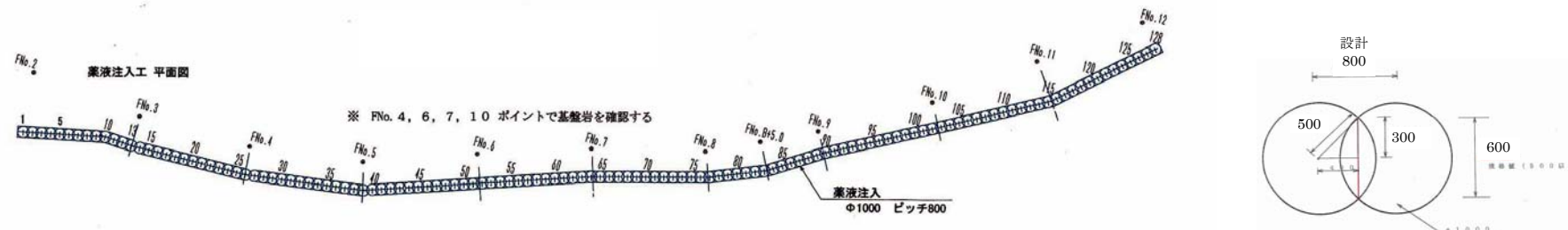


図-1.2.4 薬液注入工平面図（左）および薬液注入ラップ長（右）

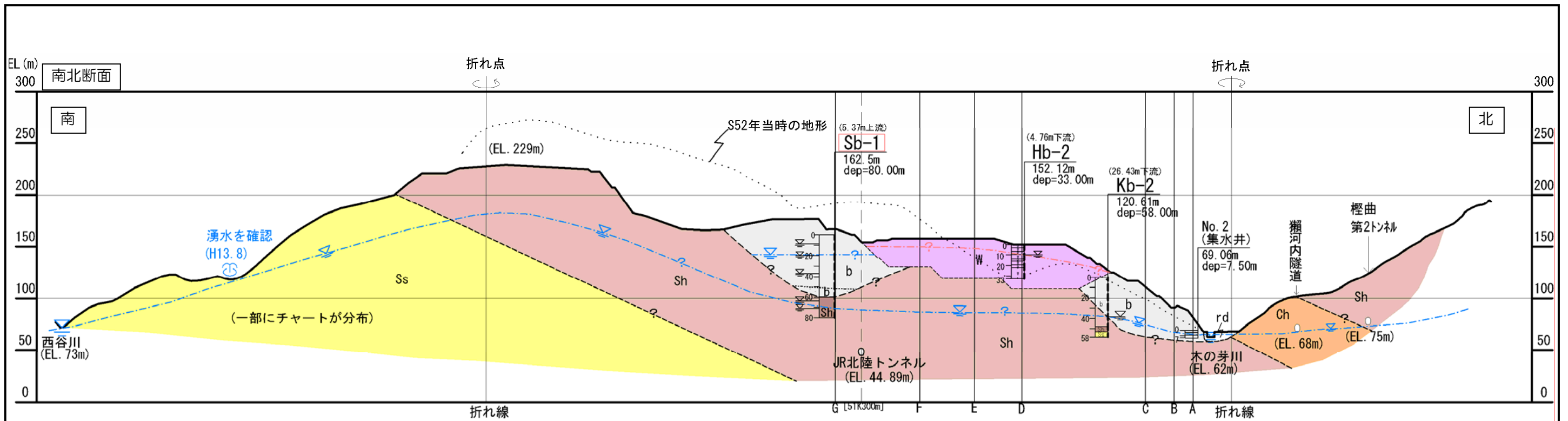


図-1.2.1 処分場南北方向地質断面図 (S=1:4,000)

凡例

地質時代	地質記号	岩相
新第四紀 完新世	b	盛土 砂、粘土
	w	廃棄物 汚泥、シュレッダダスト、一般廃棄物など
	rd	現河床堆積物 礫および砂
	dt	崖堆積層 礫および砂質土～粘性土
白亜紀後期	Po	ひん岩
	Sh	頁岩
中生代	Ss	砂岩 (砂岩・頁岩互層を含む)
	Ch	チャート

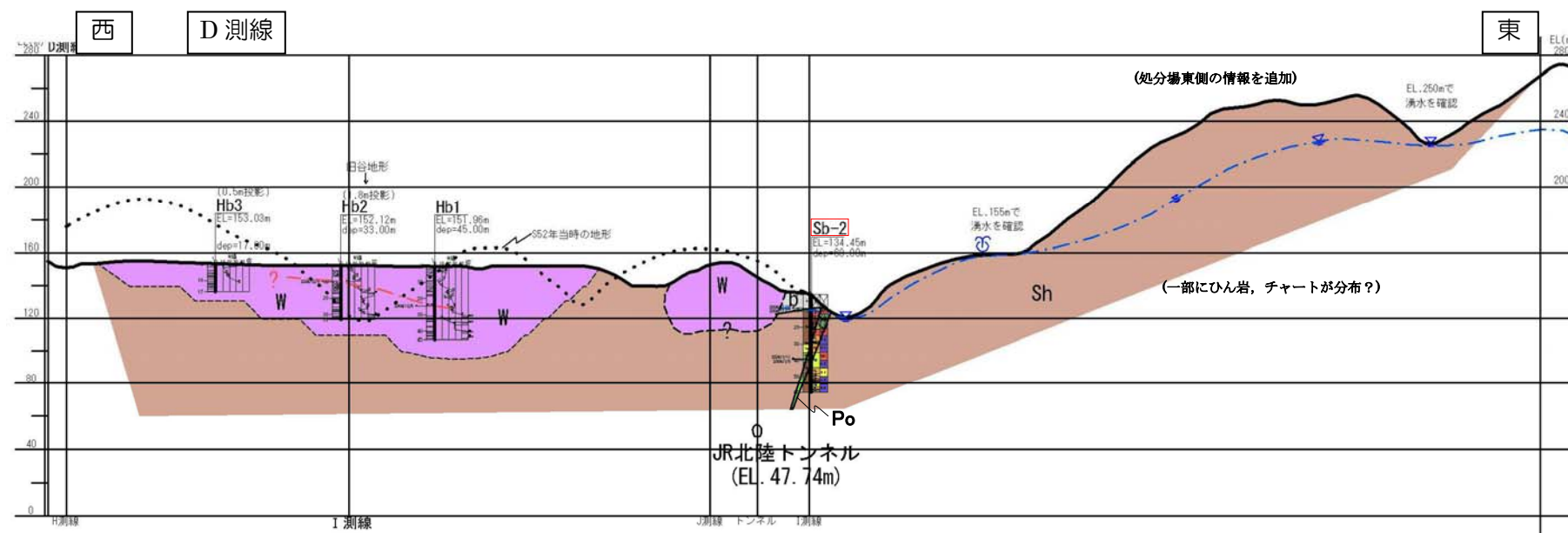
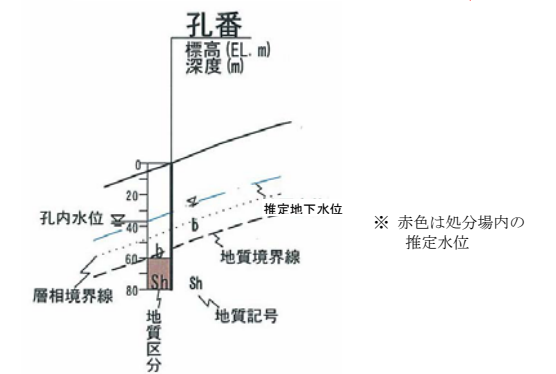


図-1.2.2 処分場東西方向地質断面図 (S=1:4,000)



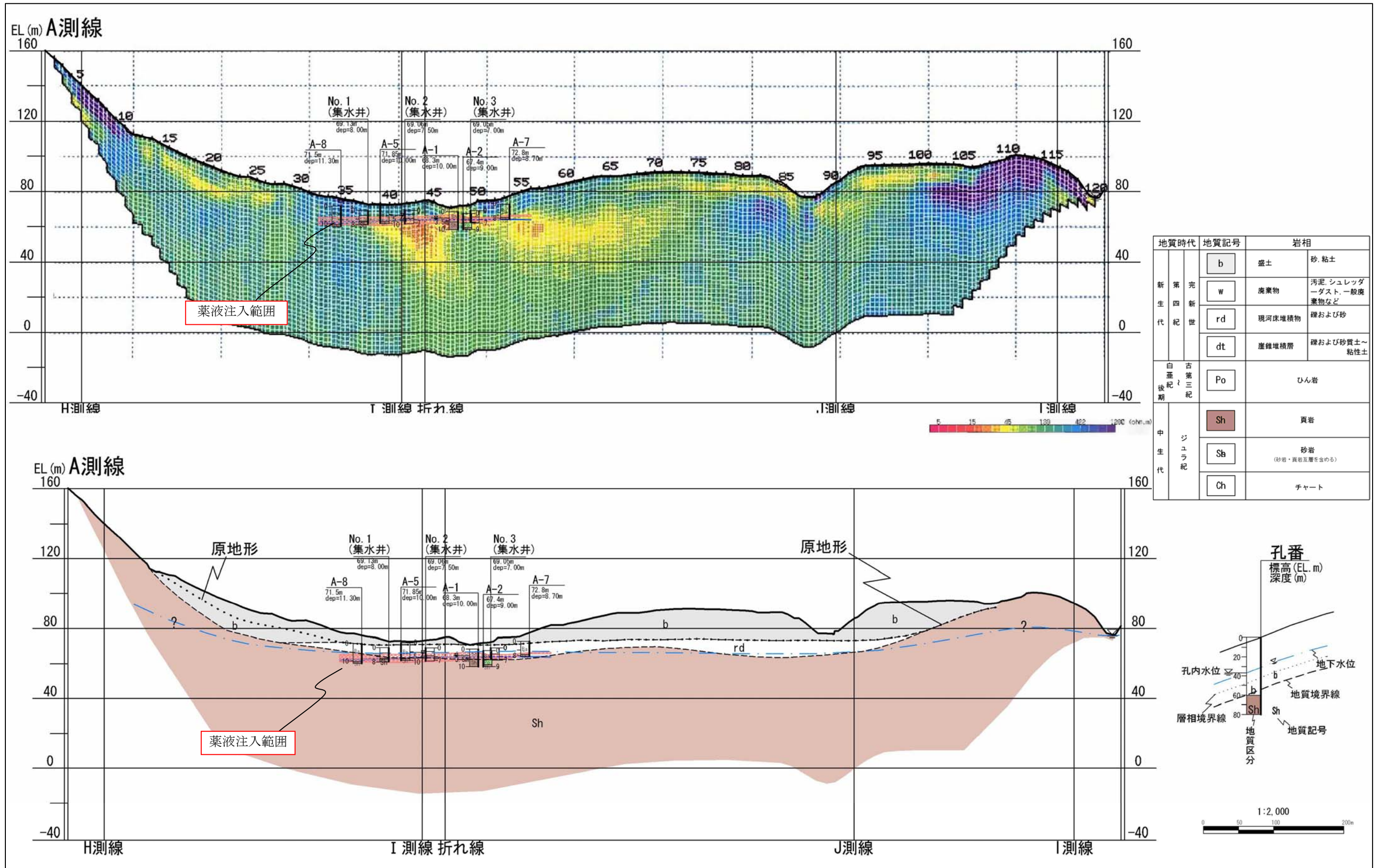


図-1.2.3 A測線沿い地質断面図 (S=1:2,000)